

1887—1921 Ryōka
川上涼花
没後100年記念展



1887—1921 Ryōka
川上涼花
没後100年記念展



川上涼花(本名音次郎)は、今から100年前の1921(大正10)年5月6日に結核のため34歳の若さで亡くなりました。そのとき日本はスペイン風邪が流行するさなかでした。

それからちょうど100年後、似たようなパンデミックの状況下に、今も涼花が眠る寺のほど近い場所で、その没後100年を偲ぶ展覧会を開催することに、時の巡り合わせを感じずにはられません。

川上涼花は、1912～13(大正元～2)年のわずかな期間にたった2回の展覧会開催のみで、日本近代美術史の1ページに足跡を残した「フユウザン会」同人のひとりでした。フユウザン会での活躍を機に『二六新報』に入社し、ポンチ絵制作のほか、精力的に美術展批評等の執筆活動も始めました。その後の1915(大正4)年前後に中野に移り住み、畑のなかにアトリエを建てて周辺の自然のスケッチに打ち込みます。「求めたものは生命の表現であり、そのために線を活かす研究からはじめ、調子の研究に移り、一枚の絵画としての価値をもつまで一年あまりの激しい研究を重ね、中野にある木は片っ端から描いた」¹といわれています。晩年に取り組んだ、日本画や絵巻物などの作品をみると、真実の自然、自然の根本的なものを再認識した涼花にとって必然的な制作行為だったようにも思われます。それはコロナ禍に生きる今の私たちにも共通する感覚と時間が流れているような気がしてなりません。

川上涼花の戦後の総合的な回顧展としては、2002(平成14)年に田中淳氏が企画構成を手がけ、萬鉄五郎記念美術館、茅ヶ崎市美術館を巡回した『川上涼花という画家がいた』があります。涼花の作品の多くは先の大戦で失われましたが、美術館や個人の所蔵として現存している20点ほどの作品をもとに涼花の芸術

を回顧しました。

それから20年近い歳月が流れました。そのあいだ、2016(平成28)年開催の『動き出す!絵画 ペール北山の夢』で、北山清太郎氏旧蔵の涼花作品が展示されるなど、2002年の回顧展で出品されていない作品の所在も判明してきました。本冊子では、北山氏旧蔵の涼花作品に関するテキストを和歌山県立近代美術館の宮本久宣氏にご寄稿いただいたほか、今回新たにわかった涼花作品を数点、年譜に掲載しております。2002年の回顧展の中心となっていた田中淳氏にもテキストをお寄せいただきました。

生前の涼花と深い友情で結ばれ、涼花作品の多くを保存・継承していたのは、没後に『川上涼花画集』²の発行も手がけた酒井億尋氏³でした。

戦後、酒井氏は旧蔵の《鉄路》、《植物園風景》、《麦秋》など代表的な油彩作品を東京国立近代美術館とアーティゾン美術館(旧ブリヂストン美術館)に寄贈しています。一方、油絵1点、水彩画1点、木炭画3点を涼花の弟、川上藤次郎に返却しました。その後、これらの作品は藤次郎の娘たちがそれぞれ今に受け継いでいます。

今回の展覧会では、家族たちに残された作品を紹介し、涼花34年間の人生を振り返りたいと思います。

主催者

1. 大森商二「川上涼花の思ひ出」(『川上涼花画集』1936/昭和11年1月より)
2. 『川上涼花画集』1936(昭和11)年、編集者は大森商二、発行人は酒井億尋
3. 酒井億尋(1894～1984)新潟県佐渡出身。実業家として腕を振るう一方、コレクターとしても知られる存在となる。コレクションには、涼花や中村彝、津田青楓ら親交のあった日本の洋画家の作品をはじめ、印象派や20世紀フランスの代表的作品なども含まれていた

謝 辞

To Nobuko Kawakami (1926-2020)

本展の開催にあたり、ご協力いただきました美術館、関係諸機関、
図版の掲載をご許可くださいました関係者の皆さま、ご指導賜
りましたすべての皆さま、並びに、ここに記すことができなかつ
た多くの方々に本展覧会の実施に格別なご協力と励ましのお言
葉をたくさんいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

iwao gallery
神奈川県立近代美術館
和歌山県立近代美術館

内田桂子
田中淳
港千尋
宮本久宣
(五十音順 敬称略)

目次

- 2 ごあいさつ
- 6 川上涼花の没後 100 年の展覧会によせて
田中淳
- 9 出品作品図版
- 15 北山清太郎の残した川上涼花作品
宮本久宣
- 27 川上涼花年譜
- 44 執筆原稿・美術展評等一覧
- 47 新聞、雑誌等の挿画



川上藤次郎の広島醸造試験所退官を
祝って撮影された家族写真
(背後の掛軸が川上涼花作品)

川上涼花の没後100年の展覧会によせて

田中淳（大川美術館長、東京文化財研究所客員研究員）

画家川上涼花（1887（明治20）年、現在の東京都文京区本郷生まれ、本名音次郎）は、1921（大正10）年5月6日、東京で結核のため死去した。享年34歳。今年5月で、この画家が逝って100年となる。

今日でも川上涼花という画家を知る人は少ないことだろう。涼花は、1912（明治45／大正元）年に、ちょうど日本にもたらされたゴッホ、セザンヌ、マティス等々のポスト印象派のイメージに触発され、芸術の自由、個性の表現を主張する青年画家たちとともに結成されたフュウザン会に参加している。この年に描かれた《鉄路》（1912年、東京国立近代美術館）は、日本におけるポスト印象派受容の先駆的な作品のひとつにあげられる。ゴッホ風にギラギラと輝く太陽が描かれているのに加え、ゴトゴトと走る電車も描かれ、20世紀初頭の東京周辺の近代化をあらわした作品と評されている。描かれた地は、山手線の大塚駅と池袋駅の間の跨線橋とされている。そうしたことから、最近のこと、豊島区、とくに池袋周辺の歴史的な変遷をテーマにした展覧会では、会場のはじめにこの《鉄路》が象徴的に展示されていた。（「池袋への道－近世の歴史資料、池袋モンパルナス、森山大道」展、東京芸術劇場、豊島区、2021年1-2月）また、展覧会を機に、新聞にも大きくこの作品が紹介されたので、目にされた方もいらっしゃるだろう。（「美の履歴書：685「鉄路」川上涼花 ひと走る電車、重ねた未来は」、朝日新聞、2021年2月16日夕刊）

しかし、フュウザン会の展覧会で、一緒に参加した岸田劉生（1891-1929）や萬鉄五郎（1885-1927）などに比べれば、なんとその名前は知れわたってはいない。その理由は、現在ま

で残る作品が、わずかでしかないということにつきるだろう。涼花の没後、彼の作品は、実弟の川上藤次郎が引き継ぎ大切にされていたそうである。その実弟のお仕事が醸造関係の研究だったそうで、勤務先が広島市内であった。そして1945（昭和20）年に原爆で被災され、作品も失われてしまったということだ。涼花の作品の少なさは、まことにこの不幸にあるといえるだろう。

それでも、なんとか川上涼花という画家をあらためて紹介したいとおもい、2002（平成14）年のこと、「川上涼花という画家がいた 萬鉄五郎、岸田劉生、川上涼花が向きあった自然／風景」を開催した。展覧会を開催していただいた萬鉄五郎記念美術館と茅ヶ崎市美術館には、今でも感謝している。このときは、油彩画、素描、水彩、日本画など、知られているかぎりの涼花作品20点ほどを展示することができた。画家の没後、1936（昭和11）年2月に「川上涼花遺作展」が銀座資生堂で開催されて以来の個人展ということになった。

さて、この度の展覧会は、没後100年にあたることから企画されたものである。今年2月になるが、実弟川上藤次郎の血筋にあたり、涼花は大叔父にあたるYさんから、お電話をいただき、今回の展覧会の計画をうかがった。没後100年と聞いて、正直のところ意外な感がしておどろいた。もとより有名な画家であれば、「生誕」、あるいは「没後」の周年記念にくりかえし回顧展が開催され、人々の眼と心に伝わり、記憶されるものである。それは画家を顕彰するだけではなく、後世に伝えていくという意味でも大切なこととおもう。涼花の場合も、今回の企画は貴重なことだし、気づかなかったわたしの方が恐縮におもっているしだいである。

ところでYさんからお電話をいただいたとき、わたしの勤務す

る大川美術館（群馬県桐生市）では、ちょうど丸木位里、俊夫妻の制作になる屏風仕立ての大作《原爆の図》（広島市現代美術館蔵）を展示していた。戦後、丸木夫妻は、被爆の惨状をつたえるために《原爆の図》の連作をつづけ、その完成作をもって全国に巡回公開したのだった。群馬県では、1951（昭和26）年に前橋市と桐生市で開催したという記録があることから、「70年目の原爆の図」と題して企画展を開催していたのだった。Yさんからの電話の後、涼花の作品の顛末が思いおこされて、なにやら《原爆の図》が川上涼花を呼んでしまったかのような不思議な気持ちになった。

最後になったが、川上涼花という画家に対する評価として、涼花と学生時代から交友があった文芸評論家青野季吉（1890－1961）のことだが、今でももっともその本質をいいあてているようにおもわれる。

「涼花にとっては、同時代のどんな絵も自然の冒涇と思はれ、自分を低く、低くして、地平に腹ばいにならなければ、自然の真の美に同化することができないと考えられたのに相違ない。私は、その風貌からして羊の化身のような涼花を思いうかべ、その低さへの悲願をめぐって、興味がつきない。」
（『ひとりの画家』、『座右宝』4、5号、1946年9月）

涼花が、後年ひたすら打ち込んだ中野の風景をモチーフにした木炭素描を念頭においたことばであるが、ここに涼花の画家としての姿勢と表現を見ぬいているといえるだろう。さて、コロナ禍の最中、ここは涼花の「低さへの悲願」にならって、新緑の緑に、自然のうつろいに目をむけるのもいいかもしれない。

1887—1921

川上涼花

没後100年記念展

2021.5.5^{〔水・祝〕} — 9^{〔日〕}

iwao gallery

出品作品図版



川上涼花《あざみ》
1914（大正3）年
油彩、カンヴァス
41.5 × 49.4cm

●木の椅子の上に置かれたガラスコップに生けられた3輪のアザミの花やつばみ等が描かれている。四方にばらける花の構図やアザミの紫のアクセントからゴッホの《アイリス》（メトロポリタン美術館蔵）を思い起こさせる。



川上涼花《蕤つみの庭》
1919（大正8）年
水彩、紙
32.4 × 44.3cm

●柿の木が青紫系の色でくねくねと描かれている。涼花は中野の柿の木のある農家の庭先を多く描がいており、他の水彩作品や木炭画にも同様のくねくねした柿の木が登場する。



川上涼花《裸木並木》
1917（大正6）年
木炭、紙
30.9 × 47.3cm

●東中野にアトリエを構えてからは、周辺の風景を題材にたくさんの木炭画を制作。背の高い樹木が屹立する風景は、同じ年に制作された木炭画である石橋財団アーティゾン美術館所蔵の《桐と麦》や東京国立近代美術館所蔵の《風景》との共通点がみられる。



川上涼花《柿の木と藁》
1916（大正5）年
コンテ、紙
47.3 × 31.1cm

●画面を対角線上に大きく柿の木が大胆に描かれている。柿の木の根元には、積み藁が描かれているが、ふと、農作業の合間に一休みしている農夫のようでもある。涼花は柿の木が主題の絵を多く描いた。



裏面《藁と家》

北山清太郎の残した 川上涼花作品

宮本久宣 (和歌山県立近代美術館学芸員)



川上涼花《藁塚》
1916 (大正5) 年
コンテ、紙
31.7 × 47.1cm

●積み藁ということではモネやミレーの《積みわら》を連想させるが、モネやミレーの積み藁は麦のもので、涼花が描いた積み藁は稲藁の違いがある。また、モネの絵もミレーの絵も、藁塚の向こうははるかに広がる地平であるのに比べ、涼花の絵はすぐ後ろに森のようなものが黒く描かれていて画面全体は黒い絵になっている。

本稿では、2002 (平成 14) 年に開催された「川上涼花という画家がいた」展¹ののち、新たに見つかった川上涼花の作品と資料を紹介します。作品は、いずれも当館で 2016 (平成 28) 年 11 月から翌年 1 月にかけて開催した「動き出す! 絵画 ペール北山の夢」²という展覧会に向けた調査で見つかりました。同展はペール北山こと、北山清太郎 (1888-1945) をキーパーソンとし、明治末から大正中期にかけて、西洋美術の影響を受けて展開した、洋画を中心とする美術動向をテーマとしました。川上も重要な画家として取り上げたひとりです。

北山は 1911 (明治 44) 年に上京し、翌年「日本洋画協会」という組織を作り、『現代の洋画』、『現代の美術』などの美術雑誌を編集、発行したほか、川上も関わったフュウザン会³の展覧会開催や、その目録および機関誌『フュウザン』の編集と発行も手がけた人物です。画家たちへの献身から、ファン・ゴッホを支えたペール・タンギー (タンギー爺さん) になぞらえて、ペール・北山という呼び名が与えられました。

フュウザン会に関わった北山と川上は、直接交流を持ったは

-
1. 本稿も同展に依り、「川上涼花という画家がいた」展図録 (萬鉄五郎記念美術館・茅ヶ崎市美術館、2002 年) を参照の上で執筆しています。
 2. 東京ステーションギャラリー、下関市立美術館との共催でした。北山は国産初のアニメーション制作者としても注目されています。詳しくは、「動き出す! 絵画 ペール北山の夢」展図録 (開催各館、2016 年)、をご覧ください。
 3. フュウザン会の名前はフランス語で木炭を意味する「fusin」からとられています。当初「ヒュウザン」という表記でしたが、より原語に近いとして「フュウザン」に改められました。本稿でも基本的には「フュウザン」と表記します。



【図1】
川上涼花《風景》
1909（明治42）年
水彩、紙
17.7 × 28.1cm
和歌山県立近代美術館蔵

ずです。北山が主宰した『現代の洋画』や『現代の美術』には、川上の文章や絵が掲載されており、北山の手元に作品が残っていたこともその証となります。フェウザン会の解散後、北山は岸田劉生や木村莊八と活動をともしたので、川上とは親しい交流が続いた訳ではないと考えられますが、作品は今に伝わりました。それらは川上の短い画歴のなかでも、特に作品が確認されていなかった作画初期の作例であると考えられます。

ここでは、北山から伝えられた川上作品2点とさらにそう推測される作品2点を、和歌山県立近代美術館が所蔵する自筆原稿とともに紹介することで、若かりし頃の川上の作画活動を、北山の活動とともに振り返ります。

最初に紹介する《風景》【図1】は、「動き出す！絵画 ペール北山の夢」展で紹介したのち、北山に關係する所蔵者より当館にご寄贈いただきました。画面右下に「DEC. 09.」との書き込があり、1909（明治42）年12月という制作年月が分かります。タイト

ルは作者本人に依るものではなく、ひとまず当館でそう設定したものです。制作年月の左側には、作者を示すマークであるモノグラムが認められるものの、署名はなく当初はだれの作品か分かりませんでした。しかし、『現代の洋画』第9号⁴にカラー図版で掲載された「秋の畦路」【図2】と題する川上作品の中に、同じモノグラムがあることから、この作品がその手になると分かりました。のちに同じモノグラムが、川上の1908（明治41）年の《写生帖》の中に書かれていることも分かりますが、北山が掲載した図版のおかげで作者が判明しました。

フェウザン会の結成以前、川上が太平洋画会研究所に通っていた頃の実作品としては、先述の《写生帖》が残るのみであったため、画面の書き込みから1909（明治42）年の制作と分かる

「秋の畦路」の図版も貴重な資料でした。

同じ制作年の《風景》は、その時期の作風を伝える重要な作例となります。「秋の畦路」と共通する茶褐色を基調とした色づかい、また農作業を行う人を配した風景描写は、太平洋画会研究所で学んだ川上が、フォンタネージ、浅井忠らから連なる明治時代の洋画の系譜を継承していることを伝えています。家並みの奥には、高い柱を数本立てて、白い布のようなものを張り巡らせた特徴的な構造物がいくつか見え、右奥には煙が上がっているようにも見えます。構造物については、かすみ網ではないかというご意見をいただいたこともあります。が、未だ具体的に分からないため、ご

【図2】
川上涼花《秋の畦路》
1909（明治42）年
*『現代の洋画』第9号
掲載図版



4. 『現代の洋画』第9号、日本洋画協会、1912年12月。

存じの方にお教えいただければ幸いです。

北山は1909（明治42）年の川上作品を所蔵していたわけですが、ふたりが出会った時期については明らかではありません。北山は、1908（明治41）年に横浜で「みどり会」という水彩画のグループを作ったことが分かっています。しかし活動はほぼその年のみで、翌年には朝鮮半島に渡ります。北山はこの時期の若者によくあるように、大下藤次郎が広めた水彩画から美術への関心を深めました。北山が面白いのは、大下の元に飛び込んで、水彩画の画材販売や『みづゑ』の編集にまで関わるようになったことです。1911（明治44）年5月の上京はそのためでした。大下没後に北山が独立して手がけた『現代の洋画』に、川上の記事や作品図版が掲載されるのは、1912（大正元）年12月発行の第9号からです。そのため、ふたりは同年8月からのフェウザン会結成に向けた動きの中で交流を深めたと考えるのが自然で

〔図3〕
川上涼花《夕日を受けたる丘》
1912（明治45／大正元）年
水彩、紙
17.2 × 25.5cm
個人蔵



〔図4〕
川上涼花《石垣》（図3の裏）
制作年不詳
水彩、紙
24.8 × 16.5cm（イメージ）



しょうか。もちろん美術に関わる緊密な世界のなかで、それ以前に知り合っていた可能性も残ります。

次に紹介する《夕日を受けたる丘》〔図3〕も、川上の作品だと確認できます。画面左下の書き込みから1912（明治45／大正元）年の制作だと分かり、その下の「RYOKWA」という署名は、同年1月に描かれた《鉄路》（東京国立近代美術館蔵）にある署名の表記と共通します。表現の上でも、油彩と水彩の違いはありますが、本作に見られるピンクや黄といった鮮やかな色の使用、そして筆致を生かした描写には近しさを感じられます。《鉄路》について、これまでファン・ゴッホの影響が指摘されているように、本作にもこの時期特有のポスト印象派からの影響を指摘でき、日本におけるその盛んな受容を示す作例ともなります。

実はこの作品には、裏にも絵が描かれています。石垣とその横を流れる水路を描いたこの絵は、仮に《石垣》〔図4〕というタイ

トルを設定するとして、川上が反故にした自身の作品だと考えられます。絵の上には、「夕日を受けたる丘」という文字が書かれており、これは表の作品のタイトルだと判断されます。作風から、表の《夕日を受けたる丘》を描く以前、当館所蔵の《風景》[図1]と同じく太平洋画会研究所に通う時代に描かれた旧作だと考えられ、さらに言えば、いかにも習画期の思わせる雰囲気から、《風景》よりも早い制作年が設定できる可能性もあります。

[図5]
川上涼花と推定《風景》
制作年不詳
水彩、紙
20.0 × 25.5cm
個人蔵



残りの2点のうち、これも仮題の《風景》[図5]は、「動き出す! 絵画 ペール北山の夢」展に際して、推定ながら川上作品として紹介しました。画面にも紙の裏にも署名や制作年は確認できませんが、東京文化財研究所に田中淳さんをたずねたところ、《写



[図6]
川上涼花と推定《水路》
制作年不詳
水彩、紙
17.5 × 26.8cm
個人蔵

生帖》を見て確認するようにというご助言、ご指導をいただき、保管先をお願いして拝見にうかがいました。その上で、特徴的な紫色など特に色彩面が共通することを拠り所として、川上作品である可能性が高いと判断しました。制作時期は確定しないものの、《写生帖》と同時期からフェウザン会結成以前ではないかと考えます。《夕日を受けたる丘》よりは早い時期だと思われますが、明るい色彩の使用と自由な筆致の重ね方には、《石垣》や当館の《風景》[図1]とは異なる表現への志向を感じます。また『川上涼花画集』⁵⁾に掲載された大正期の作品とは作風が異なるので、川上の作品であれば、若い画家仲間と「紫紅会」を作るなど、互いに刺激を受けながら新しい表現に向かっていった時期の作品ではないかと推測します。

最後の1点《水路》[図6]も、「動き出す! 絵画 ペール北山の

5. 大森商二編『川上涼花画集』、酒井億尋、1936年。

夢」展の時に見つかった作品ですが、展覧会には出品しておらず、今回が初紹介となります。鮮やかな青が他に見られなかったことと、筆致に少し朴訥とした印象を持ったことから、その時は推定であれ、川上作品だとして紹介することをしなかったはずです。しかし、今回改めて作品を見ていると、空や水面、小屋や船などに使用されている紫色は、やはり川上のものではないかと考えるに至りました。当時の判断や考察の甘さは反省するほかありませんが、この機に紹介し、ご意見をいただきたいと思います。川上作品だとすれば、本作も上記の《風景》[図5]と同じ時期の制作と位置づけて良いと考えますが、対象を再現しようとする意識は高く、それよりは早いことも想定されます。

作品は以上となり、残り当館が所蔵する自筆原稿「木版の価値」を紹介して、本稿を終えます。この原稿は、『大阪朝日新聞』第11413号(1913年11月16日発行)に「日曜附録」として掲載された「版画展覧会」という特集記事の原稿集に含まれています。同記事は、当時画家の間で関心が高まった版画⁶について、川上のほか岸田劉生、斎藤与里ら何人かの画家が寄せた文章と図版で構成されています。川上は「木版の価値」という文章[図7-1]とともに、木版画「我れ昇る」[図7-2]を寄せました。

文章は稿末に付した写真[図8]の下に書き起こしたとおりでありますが、内容はいかにもこの時代の美術家らしく、美術表現には作る人間の内面がともなっていなければならないと述べるものです。川上は、木版を彫ることで生まれる独特の味わいのみに価値を認めるのは危険なことである、肉体が生み出す表現には精

6. 版画を美術表現のひとつとする動きが、明治時代末から大正初期にかけて活発になります。この頃多くの画家が版画への関心を高め、制作に取り組みました。このあたりの事情は、「もうひとつの日本美術史 近現代版画の名作2020」展図録(和歌山県立近代美術館・福島県立美術館、2020年)でも紹介しています。

【図7-1、2】
川上涼花
「木版の価値」および「我れ昇る」
(『大阪朝日新聞』第11413号、
日曜附録「版画展覧会」より)



【図7-2】



【図7-1】

神がともなっている必要がある、版画の表現の価値もそこに認めるべきである、と主張しています。川上に関しては、スケッチブックや作品の書き込み以外に文字を書いた資料がほぼ伝わっていないため、筆跡を示す貴重な資料とも言えるでしょう。

この原稿集は、各自の原稿や挿絵を貼り込んだ紙をまとめて、冊子体に仕立てられています。残念ながら、所有者を示す手がかりがあったと考えられる巻頭ページの一部が切り取られており、来歴は分かりません。「版画展覧会」の記事は、「版画号」と銘打って北山が『現代の洋画』23号⁷で版画を特集した際に一部が転載されますが、川上の原稿は挿絵とともに誌面の都合で掲載が見送られました。記事自体は北山とも関係があると言えますが、その関係者とは異なるところから当館は収蔵しました。

最後にもうひとつだけ、和歌山の作家と川上のつながりを紹介したいと思います。第1回のフェウザン会の展覧会には、和

7. 『現代の洋画』第23号、日本洋画協会、1914年2月。

歌山市出身の田中恭吉（1892－1915）も作品を出品していました。当時、東京美術学校に通う画学生だった田中は、展覧会初日の1912（大正元）年10月15日午前に会場を訪れます。当日の日記に田中は、会場に並ぶ作品に圧倒され、興奮する気持ちを書き残しています。そして展示されていたなかでも、一番好きな絵として認めたのが川上の作品でした。田中は日記に続けて、「いい画があったのだ、たまらなくすきな画があった、第一川上さんの画を好もしく思ふ」⁸と記しています。その後田中は、恩地孝四郎、藤森静雄と版画誌『月映』を刊行しますが、川上よりも早く1915（大正4）年に23歳で亡くなりました。川上と同じく結核でした。その遺作と資料の多くは恩地が守り、そのご子息より故郷の美術館へと当館に寄贈いただいています。

田中が会場で見たフェウザン会の展覧会出品作ではありませんが、好きだと言った川上の作品は、その展覧会の運営を担い、ともに会場にいた北山が当館に届けてくれたことになります。その北山の手がけた雑誌の多くは、当館で収集を進めることができました。100年以上前、同じ場所、同じ時にあって、形は違えども美術に情熱を傾けて残したそれぞれの仕事、いまこの和歌山の美術館に集まっています。それを考えると、少々感傷に過ぎますが、彼らがここに集まって昔話に花を咲かせている、あるいは熱く芸術論を交わしている、そんな姿がふと頭に浮かびます。

末筆となりましたが、没後100年の大切な展覧会に関わる機会を与えてくださいました辻宏子様をはじめとする川上涼花のご関係者のみなさま、そしてその作品を伝え、私がこの場に関わるきっかけを与えてくださった北山清太郎とその関係者のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

8. 三木哲夫「田中恭吉年譜」（『田中恭吉作品集』、玲風書房、1997年）、にこの部分の書き起こしが掲載されています。



〔図8〕川上涼花
自筆原稿「木版の価値」
（『大阪朝日新聞』日曜附録
「版画展覧会」原稿集に収載）
1913（大正2）年
和歌山県立近代美術館蔵

木版の価値

川上涼花

総ての事人間を離れて存在しない。然し人間を離れて、木版を存在させている版画家がある。随分危険な木版だ。随分不安な版画だ。随分呑気な版画だ。

錦絵の木版は繊巧な技巧によって賞玩されている。今の東京版画倶楽部の木版は粗彫の技巧を喜ばれている。是等は共に人間を離れたる木版だ。版面と刀の關係によって木版が出来するには違いないけれど、版面と刀の關係の中に自分を見出していない木版に価値のあり得ようがない。版の味というものがある。木版の味とは、一般に木版の価値の標準になっている。それは版に接した時其の面乃至刀の關係によって、ある一種の快味を感じる事なのだ。随分危なかしい価値の標準だと思ふ。

人間が眞に人間になっているとき作られる木版にこそ価値がある。作者の肉であり血である木版にこそ価値がある。単なる情調とか、階調とかいうものはスッカリ人間を離れた亡者の喜悅に共鳴するばかりなのだ。眞に人間の作る木版にも情調と階調がある。――是れは人間とピッタリ接している。肉の運動と靈の呼吸とを示しているのだ。

※自筆原稿より書き起こし。基本的に旧字は新字に、旧仮名づかいは新仮名づかに改めた。



1915（大正4）年、東中野に新築したアトリエ



川上涼花年譜

Kawakami Ryoka

〔凡例〕

- ・本年譜は、川上涼花の制作を時系列に展望することを目的として、現存が確認できない作品、作者推定の作品も含め、その作品図版を事績とともに年ごとに配し、紹介するものである。
- ・作品図版には、作品名、技法の順に情報を付し、現存が確認できる作品については、個人蔵を含めその所蔵者を明記した。
- ・作品名称の後に「*」を付した作品は、現存が確認できず、『川上涼花画集』（1936年）を中心に、過去の刊行物からの複写となる。
- ・作品の制作年代については、田中淳『川上涼花ノート』（『東京国立近代美術館研究紀要』第5号、1996年）、『川上涼花という画家がいた』展図録（2002年）、田中淳『画家のいる「場所」 近代日本美術の基層から』（ブリュッケ、2005年）を参照した。ただし一部は推定となる。

1887

明治20年

9月 川上仲造・ちかの三男として東京市本郷4丁目（現、東京都文京区本郷）に生まれる。本名音次郎。兄弟には姉と弟(四男)藤次郎(のちの広島醸造試験所)。

1905

明治38年 18歳

3月 麹町区商工中学校卒業、太平洋画会研究所¹に入る。

1907

明治40年 20歳

岸田劉生、川村信雄等と紫紅会²を結成する。

1908

明治41年 21歳

制作年がわかる最初の作品として『写生帖』が残る。



《写生帖》個人蔵

『写生帖』は第1ページ目に「明治四十一年四月中旬以降」と記載があり、表紙裏には特徴的なモノグラムが描かれている。内容は、人物スケッチと風景画に大別される。労働者の姿や電車内の人々、大森海岸周辺でスケッチしたものや水彩で描かれた風景画など。人物画は、対象となった人々の動きを素早く的確に捉え、風景スケッチの多くは水彩で色付けされていて、同時期の涼花のタブローを想像させてくれる。

1. 太平洋画会研究所 当時の東京市下谷区谷中真島町にあり、絵画部と彫塑部に分かれていた。絵画部では、午前が「素描」にあてられ、「臨写、石膏像及び人体写生」が課せられ、午後は「着色」として「風俗、静物、景色」の「写生」が課せられるなど、アカデミックで堅実な写実を指導していた。
2. 紫紅会 画学生の同好会のような組織。仲間内で手作りの回覧雑誌「紫紅」を発行。涼花と川村信雄が中心となって編集されたという。おもに水彩画、ほかに素描、淡彩、ペン画、日本画風のもの、漫画、コマ絵などまで入れて、台紙に貼ってリボンで結んだ、3センチほどの厚さのもの。順々に会員の手元へ回ると、作品評などを手書きで書き込んだという。

《写生帖》より



1909

明治42年 22歳



《風景》水彩 和歌山県立近代美術館蔵

《石垣》制作年不詳
水彩 個人蔵

《秋の畦路》* 水彩

1910

明治43年 23歳

3月 太平洋画会第8回展覧会（上野公園竹の台陳列館）に、《残雪》（水彩）、《少女》（油彩）を出品。

1911

明治44年 24歳

3月 太平洋画会第9回展覧会（上野公園竹の台陳列館）に、《細雨》（水彩）、《憂》（油彩）、《神田明神より》（油彩）を出品。



川上涼花と推定 《風景》制作年不詳 水彩 個人蔵



川上涼花と推定 《水路》制作年不詳 水彩 個人蔵

1912

明治45／大正元年 25歳

5月 第1回雑草会展³に《鉄路》《郵便脚夫の通る道》《蛇使い》《初夏》の4点の油彩画を出品。

9月 斎藤与里、岸田劉生らとともに「ヒュウザン会⁴」結成。

10月 第1回ヒュウザン会展に《夜の郵便夫》《漂流者》《職工が死んだそうだ》《霧中の彌彦》《野》の5点の油彩画を出品。

11月 雑誌『ヒュウザン』が刊行（編集人：斎藤与里、発行人：北山清太郎）され、カラー口絵として《郵便脚夫の通る道》、「郵便夫 Y に寄せて」が掲載される。



《夕日を受けたる丘》水彩 個人蔵



《郵便脚夫の通る道》* 油彩
麦畑脇の細い寂しい道を郵便夫が行く姿が描かれている。広がる畑を短い筆致で捉えた表現により、《鉄路》同様、ゴッホの作品から触発されたことを思わせる。



《夜の郵便夫》* 油彩
第1回ヒュウザン会展に出品された作品のひとつ。全体が真黒に塗られ、地平線らしき一条の光を背負う郵便配達人の顔や手が印象的に描き出されている。幻想性の強い表現主義的な作品で他の出品者とは一線を画していると各方面から注目を集めたといわれる。

3. 第1回雑草会展 会場は芝三田・統一キリスト教会、会期5月15日～19日。ここに出品された涼花の《鉄路》、《郵便脚夫の通る道》はすでにゴッホの影響がみられる。

4. フユウザン会 1912年創設の美術団体。初めは「ヒュウザン会」と称したが、のち「フユウザン会」に改める。留学帰りの斎藤与里と高村光太郎、太平洋画界出身の川上涼花、川村信雄、三並花弟、東京美術学校のアブサント同人の萬鉄五郎、平井為成、そして白馬会洋画研究所にいた岸田劉生らが参加して結成され、10月15日から11月3日に「第1回ヒュウザン会展覧会」を銀座京橋の読売新聞社3階で開催。上記のメンバーに加え、田中恭吉ほか33名が参加。新時代の幕開けにふさわしい革新的な内容で人々を驚かせることとなった。翌年3月11日から30日まで「第2回フユウザン会展覧会」が同じ会場で開催される。11月には機関誌『フユウザン（ヒュウザン）』を発行。発行人は『現代の洋画』発行人の北山清太郎。ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌ、マティス等後期印象派やフォービスムにならって個性的な表現を打ち出し、若い画家や一部の識者の注目するところとなった。



《鉄路》油彩 東京国立近代美術館蔵

画面上部にはギラギラと輝く太陽が描かれ、その太陽の光の渦が切り通しのなかを走る鉄路とその周囲の斜面を照らし出している。当時涼花は大塚窪町に住んでおり、大塚池袋間の線路の跨線橋から見た太陽の光の渦と鉄路を、スピード感とともに短い筆致を重ねて表現している。その2年前に田端と池袋の間に電車運転が開始されており、涼花は都市化の象徴として、強い陽光による幻惑を表現しながら鉄路を描いていることになる。

1913

大正2年 26歳

3月 第2回フェウザン会展に《もれ日》《トンネル》《砂丘》《雪を催す》《服薬》《初冬》《海に沿ふて》の7点の油彩画を出品。

5月 フェウザン会解散。

このころから『二六新報』⁵の挿絵画家を兼ねた美術記者となる。



《植物園風景》油彩
東京国立近代美術館蔵
鮮やかな色彩と厚塗りの大胆な筆致が若き涼花の勢いを体現化している。フォービズム的な色彩表現との共通点が感じられる。



《トンネル》* 油彩



《砂丘》* 油彩



《初冬》* 油彩

5. 『二六新報』1893年(明治26)に創刊された日刊新聞。紙名は発行年にちなむ。資金難のため1895年いったん廃刊、1900年資金援助を得て再刊された。社説から三面記事まで、財閥攻撃や娼娼問題、労働者懇親会の主催などで当時の都市下層民衆に好意的に迎えられ、一時は多くの発行部数を誇った。

1914

大正3年 27歳

4月 栃木県野崎村観音寺に岡田徹雄をたずね1ヶ月滞在。

11月 大塚窪町の実家を離れ、大森商二、その兄憲太と中野で暮らし始める。
いまだ武蔵野の自然が残る場所で、木炭による風景画を始める。当時、日本や西洋の古典絵画に傾倒しながら、ロートレックやセザンヌにも惹かれていた。特にセザンヌの写生に惹かれ、セザンヌに関するあらゆる文献や画集を蒐集していた。



《あざみ》油彩 個人蔵



《黍藁束》* 木炭



《岩山》制作年不詳（1912-1916 想定） コンテ
萬鉄五郎記念美術館蔵

1915

大正4年 28歳

6月 東中野に画室を新築し独り暮らしを始める。中野周辺をモチーフに木炭画を描くようになる。この時期の木炭画の多くは、再び惹かれるようになったセザンヌの自然観にも共通する深い自然観察に根ざした平明な写生画であった。
夏、又木享三とともに越後大湯に山田隆治をたずね、一週間滞在。佐渡に渡り酒井億尋方に長期滞在する。



《樺》* 木炭

1916

大正5年 29歳

4月 斎藤与里、萬鉄五郎、川村信雄等と日本美術家協会を結成。
もっぱら木炭画を描き続ける



《墓塚》木炭 個人蔵



《柿の木と藁》木炭
個人蔵



《墓塚と夕陽》* 木炭



《堰 上落合付近》* 木炭

1917

大正6年 30歳

5月 第2回日本美術家協会展会場内にて「川上涼花・大森商二作品 木炭素描特別陳列」を併設開催。この展覧会に30点の木炭画素描を出展。涼花の作品は、大正3年の作が1点、同4年作9点、5年作20点からなり、いずれも中野において制作されたもので、約380枚の作品群から選んだ木炭素描であった。友人の大森商二と酒井億尋が、涼花略年譜に「この年最も多数の傑作あり」と書き記している。

9月 第4回二科展（上野公園竹の台陳列館）に、《六月写景》（素描）を出品。



《桐と麦》木炭
石橋財団アーティゾン美術館蔵



《掛稲》* 木炭



《風景（木立A）》木炭
東京国立近代美術館蔵



《木立B》* 木炭



《木立と橋》* 木炭



《田境掛稲》* 木炭



《藁束横光線》* 木炭



《裸木並木》木炭 個人蔵



《風景（小川と林）》木炭
東京国立近代美術館蔵



《立木の藁束》* 木炭



《風景》木炭 東京国立近代美術館蔵

1918

大正7年 31歳

しばらく書き続けていた木炭画を2月頃までに中断。その後、日本画制作に取り組むようになる。



《蘂束倒る》* 木炭



《社の杜の下り坂》* 木炭



《草花図屏風》紙本着色
萬鉄五郎記念美術館蔵

この時期、涼花は《草花図屏風》を2点制作している。萬鉄五郎記念美術館に所蔵されている本作品（上）。もう1点は『川上涼花画集』に掲載され、細川護立氏所蔵となっているものの、現在所在がわかっていない（左）。日本画的画題でありながら、描き方には独自性を感じさせる。



《草花図屏風》* 紙本着色



《野生の友》（部分）紙本着色
ブルックリン美術館蔵

昆虫やカエルがユーモラスに擬人化され、精緻な写生部分やホイットマンの詩、童話等から構成された全長535cmに及ぶ軸装絵巻。2002（平成14）年『川上涼花という画家がいた』展への出品のためにニューヨークのブルックリン美術館から里帰り公開され、『芸術新潮』同年10月号に「ブルックリンに潜みし草虫戯画」として取り上げられた。

1919

大正8年 32歳
日本画、水彩画と油絵を描く。



《鯉幟ある田舎家》* 油彩



《静物》* 油彩



《麦秋》水彩 石橋財団アーティゾン美術館蔵

《麦秋》油彩 石橋財団アーティゾン美術館蔵
細く背の高い木の背景に、色面で構成された田園風景が広がっており、ナビ派の影響を感じさせる。「麦秋」とは初夏の麦の刈り入れの時期のことで、画面下部には色づいた麦畑と、収穫をする人々の姿が小さく描き込まれている。黄色く染まった麦畑と空の一部が、初夏の濃い緑色や空の青色と美しいコントラストを生んでいる。



《風景》水彩 個人蔵



《風景(筈川断崖)》水彩 東京国立近代美術館蔵



《藁つみの庭》水彩 個人蔵



《風景》水彩 個人蔵



《畑》* 水彩



《農家の庭》* 水彩



《柿の巨木二本》* 水彩



《柿の木と藁束》* 水彩

1920

大正 9 年 33 歳

4 月 大森商二と奈良、京都に旅行。この年、主に水彩画を描く。

9 月～10 月 那須、御宿に写生旅行する。

秋ころから咽頭結核の兆候があらわれる。



《麦秋》* 水彩



《御宿家並》* 水彩



《柿の木小品》* 水彩



《御宿断崖》* 水彩



《柿の木の庭》* 水彩

1921

大正 10 年 34 歳

1 月～3 月 40 日ほど転地療養のため勝浦の上総興津に移り住み、風景写生をする。水彩、油彩ともに小品 6、7 点を描く。

4 月 東京芝の北里養生園に入院。

5 月 6 日 結核のため没する。浅草・浄林寺に埋葬される。



《上総の海 A》* 油彩



《上総の海 B》* 油彩



《上総の海 C》* 油彩

1936

[昭和 11 年]

1 月 酒井億尋、大森商二ら友人たちにより『川上涼花画集』が出版される。

2 月 26 日～28 日 「川上涼花遺作展」開催。

会場：銀座・資生堂ギャラリー



『川上涼花画集』

川上涼花遺作展記念出版『川上涼花画集』は、大森商二編集、酒井億尋発行。大森、酒井に加えて斎藤与里も涼花の思い出を寄稿。涼花作品図版 38 点が掲載（うち 3 点はカラー図版）され、200 部限定で出版された。本展において、38 点のうち出品作品を除いた 35 点の図版を展示。

2002

[平成 14 年]

7 月～10 月 「川上涼花という画家がいた

萬鉄五郎、岸田劉生、川上涼花が向きあった自然／風景展」開催。

企画・構成：田中淳

会場：萬鉄五郎記念美術館 7 月 27 日～9 月 16 日

茅ヶ崎市美術館 9 月 22 日～10 月 27 日



「川上涼花という画家がいた」展図録

2021

[令和 3 年]

5 月 5 日～9 日 「川上涼花 1887～1921 没後 100 年記念展」開催。

会場：iwao gallery



「川上涼花 1887～1921 没後 100 年記念展」カタログ

執筆原稿・美術展評等一覧

川上涼花は文章を書く筆もたったため、『フェウザン』や『現代の洋画』をはじめ、二六新報社に入社後は毎日のように美術展評などを精力的に執筆した。

●フェウザン会時代（1912 年～1914 年）

記事タイトル	掲載媒体
「現在記」	第 1 回ヒユウザン会 展覧会目録（1912 年 10 月 12 日）
「郵便夫 Y に寄せて」	『ヒユウザン』 第 1 号（1912 年 11 月 6 日発行）
「絵心」	『現代の洋画』 第 9 号（1912 年 12 月 1 日発行）
「大塚より」	『ヒユウザン』 第 2 号（1913 年 1 月 1 日発行）
「私信四通（涼花－劉生）」	『フェウザン』 第 3 号（1913 年 2 月 1 日発行）
「郊外の感想」	『現代の洋画』 第 12 号（1913 年 3 月 9 日発行）
「鎌倉にて（日記帳より）」	『現代の洋画』 第 14 号（1913 年 5 月 1 日発行）
「初夏の三展覧会」	『現代の洋画』 第 16 号（1913 年 7 月 1 日発行）
「滯欧記念作品を観る」	『現代の洋画』 第 26 号（1914 年 5 月 3 日発行）
「大正博の彫刻に就て」	『現代の洋画』 第 28 号（1914 年 7 月 3 日発行）
「二人の絵を見て」	『現代の美術』 第 3 年第 1 号（1914 年 8 月 5 日発行）

●『二六新報』における掲載記事一覧

入社後、挿絵（時折、「涼花生」と記名あり）や時事漫画・ボンチ絵、美術批評記事に精力的に筆をとった。涼花の批評の特徴は、実作者、しかも洋画家による批評であったこと。継続的に大量の記事をひとりの洋画家が書いたというのは同時代の他紙にはなかった。その結果、涼花がとりあげたものは幅が広く、文展はもとより、個展やグループ展にいたるまで、画家の共感と評価をこめて精力的に取り上げている。

1913（大正2）	5月21日	「初夏の展覧会（一）一、東臺画会を観て」
	5月22日	「初夏の展覧会（二）」
	5月28日	「初夏の展覧会 二、小林源太郎氏の油絵」
	5月30日	「初夏の展覧会 三、太平洋画会を観る」
	6月10日	「初夏の展覧会 四、日本水彩画会（上）」
	6月12日	「初夏の展覧会 四、日本水彩画会（下）」
	10月4日	「文展と美術記者」
	10月12日	「梅原氏の作画を観て」
	10月17日	「文展を評す（一）」
	10月18日	「創造 生活社の油絵展覧会を観る」
	10月19日	「文展を評す（二）」
	10月20日	「文展を評す（三）」
	10月21日	「文展を評す（四）」
	10月22日	「文展を評す（五）」
	10月23日	「文展を評す（六）」
	10月25日	「文展を評す（七）」
	10月26日	「文展を評す（八）了」
	10月27日	「文展を評す（八）審査に就いて」
	10月28日	「文展を評す（九）」
	10月29日	「文展を評す（十）」
	10月30日	「文展を評す（十一）日本画第二科」
	11月3日	「文展を評す（十二）彫刻（一）」
	11月5日	「文展を評す（十三）彫刻（三）」

1914（大正3）	11月6日	「文展を評す（十四）彫刻（四）」
	11月8日	「仮面主催展覧会を観る」
	11月28日	「旧フェウザン会同人其他 油絵展覧会評（一）」
	11月29日	「旧フェウザン会同人其他 油絵展覧会評（二）」
	12月1日	「旧フェウザン会同人其他 油絵展覧会評（三）」
	12月2日	「旧フェウザン会同人其他 油絵展覧会評（四）」
	12月3日	「旧フェウザン会同人其他 油絵展覧会評（五）」
	12月4日	「旧フェウザン会同人其他 油絵展覧会評（六）」
	12月12日	「自由絵画展覧会評」
	1月26日	「印象派に就て（一）」
	1月27日	「印象派に就て（二）」
	1月29日	「印象派に就て（三）」
	1月30日	「印象派に就て（四）」
	1月31日	「印象派に就て（五）」
	3月16日	「美術界所感（一）」
	3月17日	「美術界所感（二）」
	3月27日	「美術界所感（三）」
	4月3日	「美術館より 西洋画（一）」
	4月5日	「美術館より 西洋画（二）」
	4月12日	「美術館より 彫刻（一）」
	4月13日	「美術館より 彫刻（二）」
	4月14日	「美術館より 彫刻（三）」
	4月16日	「美術界所感」
	4月27日	「美術館より 日本画（二）」
	6月21日	「美術店巡回（一）三笠」
	6月22日	「美術店巡回（二）田中屋（上）」
	6月23日	「美術店巡回（二）田中屋（下）」
	6月25日	「美術店巡回（三）大丸呉服店」
	6月29日	「美術店巡回（四）琅カン洞と画博堂」
	6月30日	「美術店巡回（五）琅カン洞と画博堂」
	7月8日	「二人の絵を観て」
	10月1日	「『月映』を手にして」（上）」
	10月2日	「『月映』を手にして」（下）」
	10月12日	「秋の展覧会（一）木村荘八氏の絵」
	10月14日	「秋の展覧会（二）岸田劉生氏の絵」
	10月17日	「秋の展覧会（三）国民美術協会（上）」
	10月19日	「秋の展覧会（四）国民美術協会（中）」
	10月21日	「秋の展覧会（五）国民美術協会（下）」
	10月23日	「秋の展覧会（六）光風会」
	10月24日	「秋の展覧会（七）二科会（A）」
	10月25日	「秋の展覧会（八）二科会（B）」
	10月26日	「秋の展覧会（九）二科会（C）」
	10月27日	「廿四日の感想二つ」
	10月28日	「秋の展覧会（十）文展の日本画（A）」
	10月29日	「秋の展覧会（十）文展の日本画（B）」
	10月30日	「秋の展覧会（十一）文展の日本画（C）」
	10月31日	「秋の展覧会（十二）文展の日本画（D）」
	11月1日	「秋の展覧会（十四）文展の日本画（E）」

11月2日	「秋の展覧会（十五）文展の日本画（F）」
11月3日	「秋の展覧会（十六）文展の日本画（G）」
11月7日	「秋の展覧会（十七）巽画会」

●『二六新聞』における掲載記事一覧

1914（大正3）	10月1日	「『月映』を手にして（上）」
	10月2日	「『月映』を手にして（下）」
	10月12日	「秋の展覧会（一）木村莊八氏の絵」
	10月14日	「秋の展覧会（二）岸田劉生氏の絵」
	10月17日	「秋の展覧会（三）国民美術協会（上）」
	10月19日	「秋の展覧会（四）国民美術協会（中）」
	10月21日	「秋の展覧会（五）国民美術協会（下）」
	10月23日	「秋の展覧会（六）光風会」
	10月24日	「秋の展覧会（七）二科会（A）」
	10月25日	「秋の展覧会（八）二科会（B）」
	10月26日	「秋の展覧会（九）二科会（C）」
	10月27日	「廿四日の感想二つ」
	10月28日	「秋の展覧会（十）文展の日本画（A）」
	10月29日	「秋の展覧会（十）文展の日本画（B）」
	10月30日	「秋の展覧会（十一）文展の日本画（C）」
	10月31日	「秋の展覧会（十二）文展の日本画（D）」
	11月1日	「秋の展覧会（十四）文展の日本画（E）」
	11月2日	「秋の展覧会（十五）文展の日本画（F）」
	11月3日	「秋の展覧会（十六）文展の日本画（G）」
	11月7日	「秋の展覧会（十七）巽画会」

●『世界新聞』における掲載記事一覧

1914（大正3）	10月18日	「展覧会所感（一）日本美術院（上）」
	10月19日	「展覧会所感（二）日本美術院（下）」
	10月26日	「展覧会所感（三）文展の西洋画（上）」
	10月27日	「展覧会所感（四）文展の西洋画（下）」
	10月29日	「展覧会所感（五）文展の日本画（上）」
	10月31日	「展覧会所感（六）文展の日本画（中）」
	11月3日	「展覧会所感（五）文展の日本画（下）」
	11月4日	「展覧会所感（六）文展の彫刻」
	11月8日	「展覧会所感（七）」

〔参考文献〕
 田中淳「川上涼花ノート」、『東京国立近代美術館 研究紀要』第5号、1996（平成8）年3月
 「動き出す！ 絵画 ペール北山の夢」展図録、2016（平成28）年9月

新聞、雑誌の挿画

友人の大森商二が「漫画は涼花の他の一才能として彼の生涯を語る上に見逃し難い。（中略）もし涼花にして漫画家として身を立てる意思があったなら恐らく一流中の一流となつたであろうと思う。」と追想するとおり、軽妙で器用な漫画やポンチ絵を数多く残した。

『萬朝報』の時事漫画に投書して入選した経験もあり、特に『二六新報』の記者であった1913（大正2）年4月以来、ほぼ毎日、漫画、ポンチ絵を寄せている。

いわゆる時の政治や世相を風刺したポンチ絵をはじめ、季節の風物、近郊の風景、そこに暮らすさまざまな人々が、独特な線描で表現されている。



《袁世凱注文の椅子》『二六新報』掲載
 1913（大正2）年9月
 当時の山本権兵衛内閣の外交政策を批判した題材



《我が海軍》『二六新報』掲載
 1914（大正3）年1月
 海軍の軍艦建造をめぐる汚職事件（シーメンス事件）を皮肉る



《ひろ間》『現代の洋画』第10号掲載
 1913（大正2）年1月

《幽霊の出る家》『現代の洋画』第9号掲載
 1912（大正元）年12月

[展覧会]

会期：2021 年 5 月 5 日～9 日

会場：iwao gallery

協力：神奈川県立近代美術館
和歌山県立近代美術館

[カタログ]

企画編集：辻宏子

山室雅司

編集協力：田中淳

宮本久宣

デザイン：磯辺加代子

写真提供：石橋財団アーティゾン美術館

いのは画廊

神奈川県立近代美術館

東京国立近代美術館

MOMAT/DNPartcom

萬鉄五郎記念美術館

和歌山県立近代美術館

田村和司

2021 年 5 月 5 日